

パラスポーツ ボッチャ体験から何を学ぶか 4年生

福祉教育の一環でひょうごパラスポーツ指導者協議会の方



にお越しいただき、4年生がパラリンピック競技の一つでもあるボッチャ体験をしました。福祉教育は生涯にわたって考えていく教育であり、誰にとっても住みよいまちづくりを目指していく教育の一つと考えています。そのためには、わたしたち一人ひとり違うことが当たり前で、違うことが普通のことなのだということを実感することが大切です。一人ひとりが違うからこそ思いやりの心を持ち、人と接していくこと、声をかけあって生活していくこと、協調して生活していくことすなわち「ともに生きる」ことの大切さに気付いていくことと考えています。



今日のゲストティチャーの方も「困っているかと思った



ら自分から『わたしで助けられることはありますか』と声をかけられる人になってほしい」と伝えてくださいました。

ボッチャはジャックボール（目標）と呼ばれる白いボールに赤・青のボールそれぞれ6球ずつを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりしていかに目標に近づけるかを競うゲームです。私も初めてボールを触ったのですが、中身はお手玉のような感覚で重さは思っていた以上に感じました。大きさは野球ボールより一回り大きい感じでした。また、投げ方によっても転がり方が変わって、下から転がすように投げると遠くに転がったり、上からフワッと投げるとあまり転がらず近くに落ちたりと投げ方だけでも色々な技術が必要で、相手との駆け引きや作戦も楽しさを大きくさせるスポーツであることがわかりました。

子どもたちの感想を読むと、「車いすの〇〇さんが強かった」「車いすに関係なく楽しかった」「相手のボールをはじくのに〇〇さんの作戦がすごかった」「ボッチャはIQプレイが大事」とボッチャは障害のあるなしに関係なく共に活動できるスポーツと感じたようです。

共生社会をつくる上でこうした直接体験が大切で、車いすの方と共に過ごすことでより身近に感じる事ができたのではないかと思います。お越しいただき、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。